地域・離島歯科医療実習　レポート

学籍番号：　43188100370　　氏　名：疋田 吾子

実習先：　口永良部島　　実習期間：令和５年７月 11 日～７月 14 日

１．自然環境（立地、自然、気候、風土など）

口永良部島は、屋久島の西方沖約 12km に位置し、西北西から東南東の方向に長軸を持つ、ひょうたん形をした火山島である。平成 24 年３月 16 日に屋久島の国立公園地域とともに、口永良部島の全域が屋久島国立公園として指定された。中央部のくびれた部分を境に、西部の古期火山群地域と東部の新規火山群地域に分けられる。最高点は古岳の 657m で、低地は海岸線の導入部にわずかに見られるだけで、周囲の大部分は幅の狭い磯に海食による急な崖が迫っている。 新岳が火山活動を続けており、自噴温泉がある。

口永良部島は、海洋性の暖温帯気候にあり、山頂にマルツバキなどの火山荒原植生、その周囲にスダジイ、モクタチバナなどからなる照葉樹林が見られ、その他島の大部分はリュウキュウタケに覆われている。また、海岸部にはマテバシイ、ハマビワなどの常緑性低木林が見られる。こうした火山地形に広がる緑の景観から、「緑の火山島」とも呼ばれている。こうした自然環境の中で、環境省第４次レッドリストＩＡ 類で国の天然記念物に指定されているエラブオオコウモリを含む１２種の哺乳類が確認されている。島内ではヤクシカが放牧地や森林に生息しており、農産物等への被害が出ている。

口永良部島の景色

金岳小中学校にあった
エラブオオコウモリの標本

２．社会的背景

人口 98 人（令和５年３月住民基本台帳に基づくデータ）、高齢化率は 41.9%。

小学校・中学校は島内に１校（金岳小学校・中学校）で、複式学級である。

山海留学（南海ひょうたん島留学）といって、家族ごと・島の里親・島の祖父母宅の３つの留学制度を導入しており、毎年応募がある。

主な産業は水産業である。

口永良部島の名前の由来は、「えら」が江浦、「ぶ」が夫（漁夫）の意味を示すと考えられている。したがって、「口永良部島」は「口江浦夫島」であり、近いところにある海人の島を意味する島名である。江戸時代から明治２２年までは、「口永良部島村」と呼ばれ、広い野原を利用し、数百頭の馬が飼育されていた。島には天然の良港があり、琉球諸島から上下する船は必ずこの港に停泊していたと記録され

ている。また、幕末には異人相手の藩営密貿易所があったとされている。明治２２年に上屋久村の大字となった。

近世から現代までは硫黄鉱業、ガジュツ（ウコンの一種で胃薬の原料）の生産が盛んであった。

昭和２５年頃、２４００人であった人口は、噴火による爆発のたびに転出し、さらに高度経済成長以降人口の流出が続き、現在まで減少が続いている。

平成９年６月に屋久島との間を一日一往復する町営船「フェリー太陽」が就航し、生活者の利便性が高まった。そして自然環境保全と観光利用の両立を目指し、平成１９年３月に口永良部島は全島が国立公園に編入された。平成２７年の新岳の大噴火では、島民全員が屋久島に避難した。

３．住民の生活

島の中心部にある金峯神社で、毎年７月に金峯神社奉納という大祭が行われる。そこで奉納されるのが、男性の踊る「棒踊り」と、女性が踊る「日の本踊り」である。棒踊りでは男性が３尺（約 91cm）と６尺（約 182cm）の棒を持ち勇ましく踊り、日の本踊りでは平敦盛の最期を詠った歌詞に合わせ、女性たちが優雅に踊る。天保 12 年（1841 年）に新岳が大噴火したことを記録に留めるために始められたとも言われ、山の神様の怒りを鎮め、山が噴火しないようにという祈りが込められている。

島民の収入源は主に水産業で、イセエビの漁場となっているほか、豊富な漁場となっているため、屋久島の住民も船で釣りに行くほどの釣りの名所となっている。

また、農業については、焼酎用の甘薯やガジュツが小規模に生産されているほか、島内に自生する大名筍をはじめとした山菜の食文化も地域住民に根付いている。

畜産部門では、町営の牧場が１カ所あり、肉用牛の畜産が主に行われている。

さらに、釣りや良質な温泉を求めて観光客も多く訪れ、島内では９カ所の民宿が経営されている。

島内には、郵便局、ガソリンスタンド、商店、酒屋、自動販売機がそれぞれ１軒ずつあるが、営業時間は長くはない。商店には食料品や生活雑貨が置かれており、島民の生活を支えている。

口永良部島で
唯一の商店

食生活については、山・海の両方の幸に恵まれており、毎年旬を楽しむことができる。海の幸にはキハダマグロ、ハマダイ、オヤビッチャ、夜光貝、イセエビなどがある。また山の幸には、大名筍、シカ肉、島バナナ、ほうろく苺、シャシャンボなどが挙げられる。

島内には火山の恩恵を受けた、本村温泉、西の湯温泉、寝待温泉、湯向温泉の４つの温泉がある。いずれの温泉も源泉掛け流しである。目の前に海が広がっていたり、珍しい泉質の温泉もあったりと、秘湯中の秘湯と呼ばれることもある。地域住民の憩いの場となっているほか、観光資源にもなっている。

民宿で頂いた美味しいご飯
右下が大名筍の煮物

４．医療供給体制

島内には「屋久島町立口永良部へき地出張診療所」がある。医師は非常勤で月 2 回の巡回診療が行われており、看護師が１名常勤で勤務している。巡回診療以外の時は、医師の直接の診察ではなく、看護師が上屋久町立永田へき地出張診療所（こちらは医師常勤）に報告書式記載の上、FAX や電話で報告を行う。肉眼所見が必要な際にはメールで画像情報も添付する。診療所内には、血圧計、携帯型超音波診断装置、心電図、パルスオキシメーターのみが準備されているが、無床かつレントゲン設備も設置されていない。緊急時は海上タクシーで屋久島に搬送するか、ヘリコプターで鹿児島市内の病院に搬送となるが、天候によってはどちらも不可能となりうる。

実習概要

日　付	内　　容
7/11	8:30 ～12:30　鹿児島市～屋久島をフェリーやくしま２で移動 13:00～14:35　屋久島～口永良部島をフェリー太陽２で移動 本来、到着後ただちに設営等の診療準備を行う予定であったが、巡回健康診断車の出向と時間が重なったため、予定を変更して商店に立ち寄り、お世話になる民宿「番屋」に向かった。その後、西の湯温泉、寝待温泉を散策した。寝待温泉のすぐ近くでは、海にそびえ立つ大岩「寝待の立神」を見ることができた。 「寝待の立神」 想像以上に大きかった。 この先に寝待温泉がある。 海に面した西の湯温泉 周りにはダイビングをする観光客の姿も見られた。 島民の方も訪れる憩いの場である。
7/12	8:00 ごろ診療所に移動し、設営・準備。診療は 9:00 開始。 診療所内に設置したポータブルのチェア・ユニットとこじか号の２カ所で診療を行う。診療所内ではレントゲン撮影ができないため、必要な場合はこじか号にて撮影を行う。 午前中は成人のコンポジットレジン（CR）充填、定期検診、歯周組織検査、スケーリング、抜歯等を行った。 昼食は診療所内で、民宿が準備して下さったお弁当をいただいた。 午後も CR 充填、定期検診、歯周組織検査、スケーリングが主であった。 そのほか、クラウンがポストごと脱離した患者も来院した。

	また、認知症を抱えている上、歯槽骨吸収が著しく、抜歯など複数回にわたる処置が必要で、ご家族に屋久島や鹿児島市内の歯科医院の受診を勧めた患者もいた。 午後は小児の患者も多く来院し、CR 充填や虫歯予防検診やフッ化物歯面塗布を行った。 17:00 まで診察を行い、商店に立ち寄り、民宿に戻った。 その後また西の湯温泉に向かった。 診療所には ポータブルのユニットを設置して 診療を行った。
7/13	9:00 診療開始。 午前中は講和・ブラッシング指導のため金岳小・中学校に訪問するグループと、診療所に残るグループの２つに分かれた。私は先生と学校訪問に同行し、歯の構造や齲蝕についての講話、染め出し、ブラッシング指導、生徒からの質問対応などに参加した。 診療所には CR 充填、スケーリングの患者が来院していた。 午後は残根抜歯の患者が１名来院したのみであった。その後予約も入っていなかったため、頻繁に使う機材以外は片付けを始めた。その後も患者が来院しなかったため、全ての機材を片付け、清掃を行った。 記念に口永良部島のオリジナル T シャツが欲しいということで、購入のため皆で本村温泉に行った。本村温泉は設備が故障中で入浴はできず、残念だった。 講話をなさっている指導医の先生。 児童は皆，とても真剣に聞いていた。
7/14	10:30～12:05　口永良部～屋久島をフェリー太陽２で移動 13:30～17:40　屋久島～鹿児島をフェリー屋久島２で移動

振り返り記録

まず、歯科診療についてであるが、実際に口永良部島に行くまでは、歯科医師がいない口永良部島の島民の口腔内の状況は良好とは言い難いものなのかとイメージしていた。しかし、私が見た中にはそれほど重症な齲蝕や歯周病を有する患者はおらず、半年に１回の巡回診療には来ているという患者もいらっしゃって、個人にもよるが、歯科受診の機会がなかなかないからこそ歯を大切にしようという意識があるのだろうと感じた。

診療が始まる前日には島内放送で巡回診療のお知らせもあったが、全ての島民の診療をできるわけではないため、予防に関する継続的な指導が重要になってくると感じた。また、高齢者も多いため、口腔ケアの大切さを伝えることも併せて必要になってくると思った。

診療には、診療所内に設置したポータブルのチェア・ユニットとこじか号の、２つを利用した。最初は必要な機材の収納場所の把握に少し戸惑うこともあったが、物品の表を確認したり、先生と協力したりと徐々に慣れていくことができた。頻繁に使う器具はすぐ手に取れるような場所に配置を変更するなど、環境の整備について皆で報告し合う連携が大切だと感じた。

こじか号では、パノラマＸ線撮影以外の一通り診療行為を可能にするために、限られたスペースの中に必要なものが搭載されており、巡回診療には欠かせないものだと実際に見て思った。

私も実際に歯周組織検査やスケーリング、歯面清掃などの処置をさせていただいた。ところがポータブルのユニットは通常のユニットと比べるとパワーが弱く、歯石が多く沈着した患者だとなかなか除去することができなかった。超音波スケーラーの出力を上げても状況はあまり変わらず困っていたところ、先生から、ハンドスケーラーで除去すると良いとアドバイスしていただいた。この経験から、いかに自分が機械に頼った考え方になっていたかということや、確かな手技を身につけることは設備や環境に左右されないことだ、ということに改めて気付くことができた。

これまで臨床の現場で見たことがなく、教科書や講義でも触れられていない開面金冠が患者の口腔内に装着されていた。開面金冠は接着が現在ほど発展していなかった時代の技術ではあるものの、健全なエナメル質を残しており、かつ適合が良ければ長持ちするが、現在の材料は必要な厚みを保持するためには象牙質まで切削することが基本だとすると、少し考えるものがあるという先生のお話を聞き、新たなことを学ぶことができた。さらには、上顎の智歯抜歯を行った患者に、抜歯当日は過度な運動を控えるように説明し診療を終えたところ、時間をおいてからもう一度診療所を訪れ、「今から海に15m くらい潜るんだけど、大丈夫ですかね？」と尋ねられ、おそらく漁師さんだと考えられるが、島の生活が垣間見えた場面でとても印象的であった。

２日目には金岳小学校・中学校での講話・ブラッシング指導に同行した。生徒数は小学校が４人、中学校が６人ととても少なく、学年で区別されない複式学級での運営だった。このような学校運営を知ってはいたもののテレビで見たことがあるくらいだったため、どんな学校生活を送っているのかなど、先生や生徒に少しお話を聞けてとても新鮮であった。講話では歯の基本的な構造や、齲蝕の原因と進行の様子、唾液と口腔内 pH との関係、間食についてなど、先生がお話をされた。小学生と中学生の２回に分けて行ったが、先生のスライド内容や説明方法は学習内容や理解度に応じて変えられており、とてもわかりやすいものであった。講話途中にクイズ方式で質問したり、どうしてそう思ったか１人ずつに聞いていったりと飽きさせない工夫がなされており、小児への説明方法の勉強にもなった。実際に１人ずつ口腔内を染め出しを行い、プラークの付着状況を確認し、磨き残しが多いところを手鏡

で一緒に見ながら歯ブラシの当て方や磨き方、磨く順番などを指導した。中には染め出しを初めて体験する児童もおり、「赤く染まっているところ全部にバイ菌がいるんだよ」と伝えるととても驚いていた。最後に、先生が生徒からの質問に答えていたが、生徒からの質問の中には「上の歯に比べて下の歯の方が冷たいものがしみやすいような気がするのですがその理由はなぜですか？」、子どもの歯が抜けた時、根っこが無くなっていたのですがなぜですか？」などの鋭い質問もあり、感心してしまった。この経験が、口永良部島の児童が口腔内の健康に興味を持つ良い機会になっていたら嬉しく思う。

養護教諭と少しお話することができたが、その先生は患者として１日目に受診して CR 処置を受けておられ、若い頃に齲蝕でたくさん治療を受けたとのことだった。全国的に学校でのフッ化物洗口を推奨しようという動きがあるらしく、その先生も自身が齲蝕で苦しい体験をしたことから、個人的にはフッ化物洗口を実施したいと考えているが、屋久島全体として実施しない流れになってしまい、少し残念と語られていた。歯科医師がいない地域では、小さな頃からの歯磨きやフッ化物含有歯磨剤の使用などによる予防が重要になってくるため、このような取り組みをもっと拡大することができたら理想的だと感じたが、困難もあることを知り、まずは個人の意識の向上が必要だと思った。

そして、診療以外にも多くのことを体験することができた離島実習であった。最初はほぼ初対面の先生方と実習に行くことに少し不安もあったが、島内を散策して西の湯や寝待温泉などの秘湯や、海を一望できる高台を訪れたり、島の主と言われている巨大なドジョウ（？）を見たり、民宿で美味しいご飯をいただいたり、夜には天の川が見えるほど満天の星空を眺めたり…と様々な経験を一緒にさせていただく中で交流を深めることができた。また、６年生の７月という将来について色々迷うこの時期に先生方とお話ができたことも自分にとって大きな糧となった。また、民宿の方に大きなスイカをいただいたり、診療所の看護師さんや患者さんとお話をしたり、患者として来院された方に商店や港、散策中に再会したりと、島だからこその交流ができたと思う。島の方々は皆さんとても親切で、外から来た私たちにも大変良くして下さいった。

鹿児島大学の入試の頃から鹿児島大学には離島診療実習があることを知ってはいたが、自分が実際に同行して本当に参加して良かったと思える、学びの多い実習であった。鹿児島大学歯学部に通う学生だからこそできる体験であり、入学して良かったと心から感じた。ここで得た学びを、今後に繋げられるように、日々の病院実習や勉強にもより一層励んでいきたい。

最後に、この実習が大きなトラブル等なく進められたのは、先生方やスタッフの方、そして口永良部島の島民の皆様と、本当にたくさんの方々のおかげである。このような機会を与えてくださったことに、心から感謝申し上げたい。

参加された先生方、
歯科医師会の野口さん、
診療所の看護師さんとの記念写真。

本当にありがとうございました。